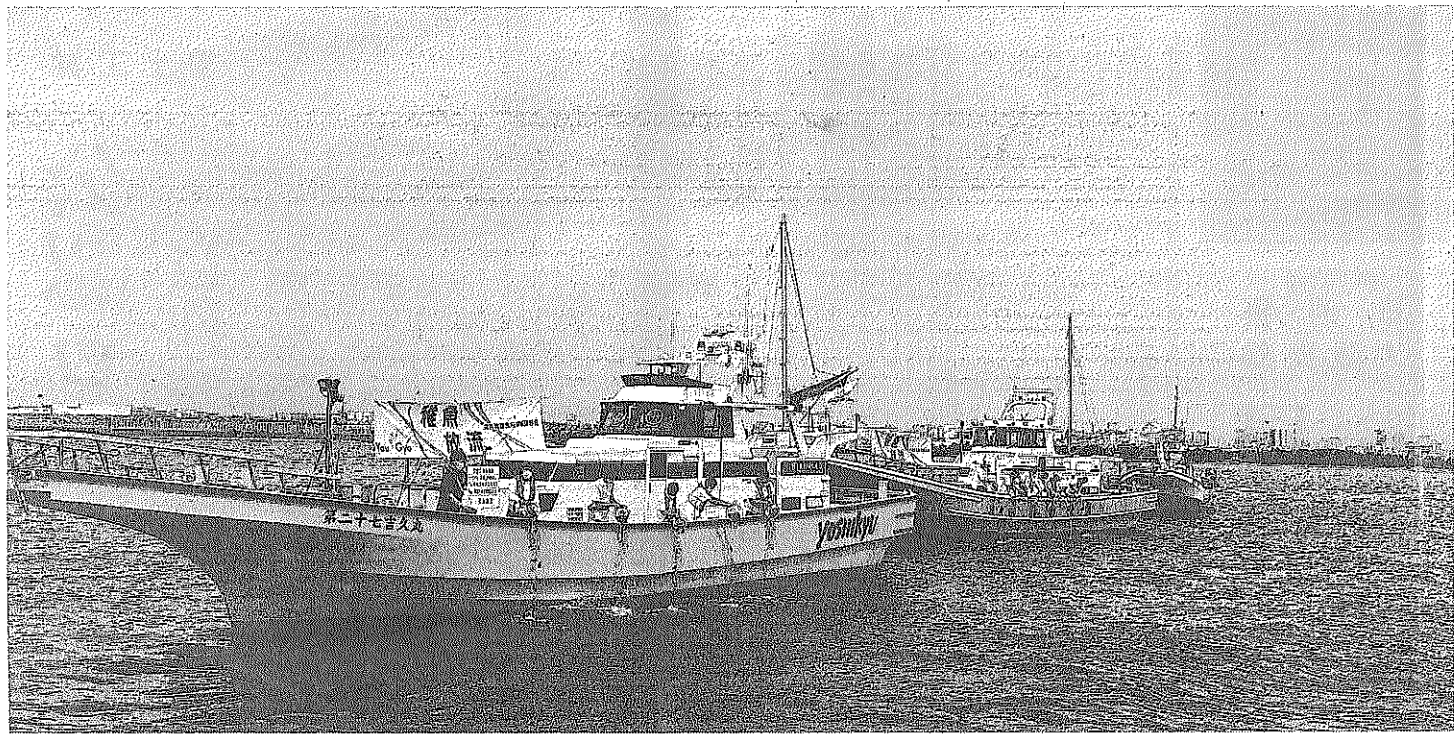


東京湾にカサゴ3万尾

キャスティングも事業に賛同

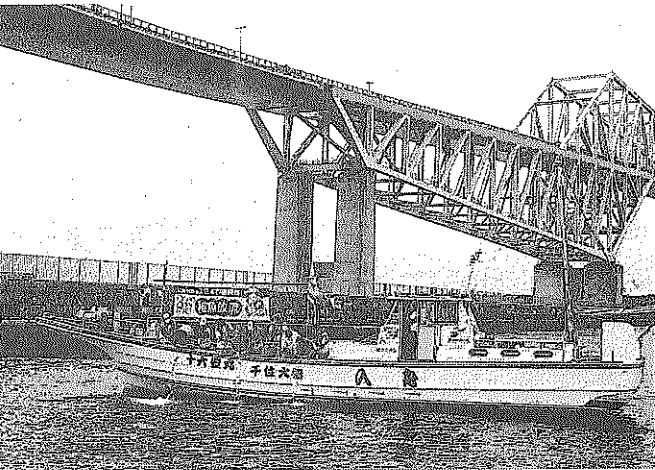


羽田空港沖の浅場に稚魚を放流する東京湾遊漁船業協同組合の組合員ら

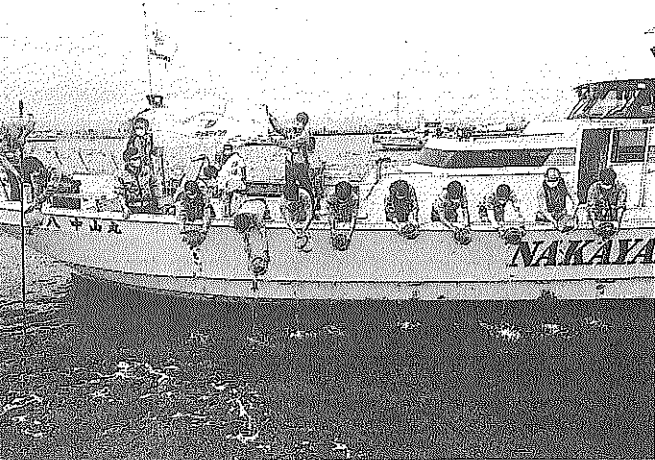
(公財)日本釣振興会「色」で年号が記入されている。これまでの放流魚(東京支部(常見英彦支部長)と東京湾遊漁船業協同組合(飯島正宏理事長)は9月14日(火)、東京湾・羽田空港沖浅場海城と若洲海浜公園海釣り施設の防波堤前にカサゴの稚魚合計2万5000尾(同組合1万5000尾、同支部1万尾)を放流した。また、釣具大型店「キャスティング」を運営するワールドスポーツ(WS/本社・東京都小平市)が同事業に賛同、羽田沖に5000尾を放流。今回は総計3万尾の規模となった。

カサゴの稚魚は愛知県産で、本年2月に生まれ体長7・5cm前後。一部に昨年5月生まれの13・14cmも含まれ、(公財)神奈川県栽培漁業協会を通じて購入した。当日は8時間かけて、放流するカサゴ稚魚を輸送してきたトラックが午前7時前に大森の船宿「まる八」桟橋に到着。早速、同組合員が、放流する3万尾のうち3000尾にタグ打ちを行った。

タグ打ちは、その後の追跡調査などで生育状況を確認するために行われるもので、今年「黄



日釣振東京支部は若洲海釣り施設前に



ワールドスポーツ・キャスティングも放流

総合学習、社会体験の一環として、毎年放流に協力してきた地元・大田区の中学生の参加は、コロナ禍で緊急事態宣言が出されていることもあり、今年は見合わせることもあった。

カサゴの稚魚は、同組合の組合員、同支部、WS・キャスティングのスタッフがトラックからリレーで5艘の放流船に運び込み、8時45分に出船した。

羽田空港前の羽田沖浅場に到着すると、同組合員らが続いてWS・キャスティングのスタッフが次々に放流した。また、若洲海釣り施設前には常見支部長ら役員が放流。平日にもかわらず多くの釣り客が竿を出しおり、放流事業のアピールにも加。同社は企業理念「釣りがつなぐ笑顔の先へ」と、環境方針「わたしたちは自然の豊かさに感謝し、企業活動を通して、釣りの環境の保全に貢献していきます」にふさわしい活動として今回の事業に参加した。

同日、若洲海釣り施設前には常見支部長と飯島理事長、WS本社スタッフが挨拶の挨拶を述べた。WS・キャスティングからは古川尚人社長はじめ15名が参加。同社は企業理念「釣りがつなぐ笑顔の先へ」と、環境方針「わたしたちは自然の豊かさに感謝し、企業活動を通して、釣りの環境の保全に貢献していきます」にふさわしい活動として今回の事業に参加した。